

人情本の序文における仮名字体

—その装飾性について—

銭谷真人

【キーワード】 仮名字体 人情本 活字 古筆 書記原理

1. はじめに

平仮名の字体は、近世を通じて収斂していき¹、明治になってついに一仮名一字体へと統一²されたものと考えられてきた。稿者はこれまで特に明治期の出版物に焦点を当て、そのことを明らかにしてきた。実際に明治期の小説・新聞・辞書³などにおいて、明治 33 年の小学校令施行規則による教育現場における字体の統一を待たずして、ほぼ一仮名一字体に統一されているものがあることが確認できた。

ただ字体は常に削減傾向にあったという訳ではなく、『横浜毎日新聞』の調査においては、ある号を境に急に紙面に使用される字体が増えるという現象が見られた。これは出版界全体で削減傾向にある中、あえて難しい字体を用いることにより、他紙との差別化を図ったものと考えられる。このような字体の使用は、字体が収斂していったからこそ際立つものであり、これを装飾的な字体の使用として考える。その当時、一般的にはあまり用いられなかった字体をあえて用いるというもので、実用的な字体の使用とは異なる原理が働いたものと見えるのである。

近世には既にこのような装飾的な字体の使用が行われていたものと考えられる。玉村 (1994)⁴では人情本の序文と口絵について、久保田 (1996)⁵では黄表紙の序文について、窪田 (2000)⁶では与謝蕪村の俳諧と書簡について、永井 (2000)⁷では近世女子往来について、それぞれ装飾的な字体について言及されている。今

¹ 浜田啓介(1979)「板行の仮名字体—その収斂的傾向について」『国語学』118

² 古田東朔 (1974)「変体がなからひらがなへ」下『言語生活』273

³ 銭谷真人 (2010)「明治中期の小説における仮名字体および仮名文字遣い—活版印刷における字体の統一について—」『早稲田日本語研究』19、(2014)「明治期国語辞書における仮名字体および仮名文字遣い」『国文学研究』173、(2014)『横浜毎日新聞』における仮名字体および仮名文字遣い—明治期の新聞における字体の統一について—」『日本語の研究』10-4 など

⁴ 玉村植郎 (1994)『春色梅兒譽美』における仮名の用字法『国語文字史の研』2、序文や口絵の中の文字について「その多くは複雑であり、美的な効果に富んだものと考えられる。本の見開きに当たる部分であるゆえ、見た目の効果を考えて、やや複雑な形にしたものと思われる。」(p203) とある。

⁵ 久保田篤 (1996)「恋川春町『無益委託』の表記：平仮名の字体について」『人文科学論集 (茨城大学人文学部紀要)』29、序文などにおける特殊な字体の使用について「視覚的な変化をつける、装飾的な用字を行うという点に中心がある」(p21) と言及している

⁶ 窪田恵理子 (2000)「与謝蕪村の仮名字体の用法—俳諧と書簡を比較して—」『国語文字史の研究』5、蕪村の使用した字体には、装飾的效果を狙っていると考えられるものがある。(p133) とある。

⁷ 永井悦子 (2006)「近世女子往来における仮名字体」『国語文字史の研究』9、振り仮名の付されている平仮名について「こうした字体は消息文の装飾性を保持するため、またそれを教養として教授するために用いられたものと考えられる」(p119) とある。

回は、玉村（1994）においても言及されている人情本を用いて、この装飾的な字体について考察していきたい。人情本は近世後期の戯作であり、この時期には平仮名字体の収斂が進み、読み書きの基本となる実用的な字体と、教養として身につける⁸装飾的な字体とに分化していたのではないかと考えられるからである。

人情本は本文のほとんどの漢字に振り仮名が付されており、平仮名さえ読めれば誰でも読めるように工夫されていた。その平仮名も複数の字体が併用されるものはあまり多くはなく、これが当時の標準的な字体の使用であったと考えられる。ただ人情本にも標準的ではない字体の使用が見られる。それが序文である。序文においては、本文では使用されない複雑な字形の字体が多用されており、本文が読める程度の習熟度では、序文は読めなかった可能性が考えられる。

本稿では人情本の本文において使用されるような標準的な字体を「実用的な字体」として、人情本の序文において使用されるような非標準的な字体を「装飾的な字体」として論じていきたい。

2. 調査方法について

人情本の序文はその作品の作者本人以外による場合もある。また各編の冒頭ごとに序文が書かれることもあり、一つの作品に複数の序文が存在することも珍しくはない。個々の序文は短いが、作品単位で見れば、ある程度まとまった分量のテキストを調査することができ、字体を十分に採集することができる。そこで本稿においては、作品を単位とし、編ごとに序文の作者や筆耕が異なっても、その作品の序文全体に見られる仮名字体として調査を行う。特定の作者や筆耕に絞るのではなく、人情本一般ではどうであったのかを考えていきたいと思う。まずは序文においては、どのような仮名字体がいわれているのか調査を行う。その上で本文に用いられる仮名字体との比較を試みることにする。

調査には国立国語研究所の「日本語史研究用テキストデータ集」⁹において公開されている人情本 8 種を用いた。『浦里時次郎明烏後の正夢』（以下、後正夢）『小三金五郎仮名文章娘節用』（以下、娘節用）『春色梅児与美』（以下、梅暦）『梅暦余興春色辰巳園』（以下、辰巳園）『浮世新形恋の花染』（以下、花染）『比翼連理花廻志満台』（以下、志満台）『春色連理の梅』（以下、連理梅）『おくみ惣次郎春色江戸紫』（以下、江戸紫）の 8 種で、底本は『後正夢』『花染』『連理梅』は東京大学文学部国語研究室蔵本の公開画像を、それ以外は国立国語研究所蔵本の公開画像を使用した。仮名字体の分類は、「学術情報交換用変体仮名」（以下、学術用）を基準として行った。¹⁰調査結果は巻末に表としてまとめた。

⁸ 矢田勉（2016）「近世における文字教育の一側面」『国語文字史の研究』15 に「平仮名についても、より多彩な変体仮名を使用できればほど、教養度の評価は高まる」（p151）とある。

⁹ <https://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/>

¹⁰ 銭谷真人（2017）「仮名字体研究における「学術情報交換用変体仮名」の検証と応用」国立国語研究所論集 12 参照。同字母異字体の判別についても、学術用を基準とした。なお本稿において使用した学術用は「学術独立行政法人情報処理

3. 序文に見られる仮名字体の位置付け

8 作品の序文の全ての仮名字体の調査結果が、巻末表の左半分の「序文における本行と振り仮名の仮名字体の比較」である。装飾的な字体の使用が見られる序文であるが、本行と振り仮名で異なる書記原理によって字体が選択されている場合もあるので、本行と振り仮名で分けて考えた。それぞれ「本」「振」とし、該当する字体が用いられている場合は「○」で示した。字体は現行の字体以外は学術用の画像で示している。やや学術用と異なる字形で現れた字体は、変体仮名番号の横に※を付し、表の最後にどのように異なるのかを示した。参考として各作品の本行、振り仮名に使用される字体数を表の下部に示した。また 8 作品全体での結果も「序文における本行と振り仮名の仮名字体の比較」の項の一番右に示した。

『後正夢』(二・四編上)『娘節用』(前・後・三編上)『梅暦』(巻一・四・七・十)『辰巳園』(巻一・四・七・十)『花染』(初・二・三編上)『志満台』(初・二・四編上)『連理梅』(初・二・三・四・五編上)『江戸紫』(初・二・三編上)と、作品によって序文の数が異なり、テキストの分量にも差があるが、本行と振り仮名の字体の比較においては、同様の結果が得られた。

いずれの作品においても、序文の本行の字体数は、振り仮名の字体数を大きく上回っている¹¹。必ずしも本行の字体が振り仮名の字体を内包しているという訳ではなく、振り仮名のみで使用される字体も存在していたが、「㍑」など、字形の単純な字体であった。やはり小さく書かなくてはならない振り仮名には、簡略な字形が好まれるようであり、同字母の字体であっても、本行には「㍑」「㍒」「㍓」といった字体が使用されているものの、振り仮名には「㍑」「㍒」「㍓」といったそれらの字体の字形を省画した字体しか用いられないという場合もあった。

振り仮名に用いられている字体を全体的に見てみると、「平仮名書きいろは歌」¹²に用いられている字体、それらの字体をさらに簡略化した字体(「や」「ら」「つ」など)、近世に非常によく見られる字体(「う」「ま」「ち」「し」「ふ」「へ」「む」など)が主として使用されており、装飾的な字体を使用する意図は見受けられない。書き易さを考慮しての実用的な字体の使用であったものと考えられる。

一方本行に使用されている字体はいかがであろうか。近世の版本の本文においては、あまり目にする事のない字体までが使用されているように見受けられる。ここで銭谷(2015)¹³における調査結果と、今回の調査で人情本の序文の本行から見出された字体の比較を試みたい。

銭谷(2015)においては、明治期の活字見本には、およそ実際の活版印刷の版

推進機構(IPA)および大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所(NINJAL)の著作物である。

¹¹ 市地英(2017)『南総里見八犬伝』の仮名字体：本行の仮名字体と振り仮名を比較して』『国立女子大学文芸学部紀要』63においても、本行と振り仮名の仮名字体の比較が試みられているが、やはり本行の方が字体の種類が多いという結果になっている。

¹² 矢田勉(1995)「いろは歌書写の平仮名字体」『国語と国文学』72-12。時代を通じてほぼ一定であり、一部の仮名を除いて現行の字体とほぼ一致していたことが指摘されている。

¹³ 銭谷真人(2015)「活字化された変体仮名に見られる装飾的字体について」『日本言語文化』32

面には見られないような字体までが存在していることに注目し、それらは装飾的な字体であったのではないかと考えた。近世の版本において実用的に用いられていなかった字体であったために、活字はあっても実際に使用される機会はなかったのではないかと考え、活字見本に見られるそのような字体が近世の版本においても実際に見られる字体であったのかを調べたのである。以下はその結果、明治期の活字見本には見られるが、近世の版本には見られなかった字体である。なおここでいう近世の版本に見られる字体とは先行研究¹⁴から見出された字体である。特に近世の戯作の仮名文字遣いについての研究から集め、近世において一般的に使用され、実用的であったと思われる字体を中心に集めたものである。

近世版本には見られず明治期の活字見本のみに見られた字体 (83 字体) (銭谷 2015 より、下線は本稿において追加)

あ 浮 字 有 雲 江 於 嘉 歛 永 繁 森 久 之 九 澄 都 作 吉 佳 新 日 漸
曾 取 所 之 當 ち 手 都 て 之 と と 登 斗 奈 難 仁 努 通 波 未 透
半 殿 比 飛 虫 不 繁 倍 保 本 第 子 良 孫 半 面 も 也 崇 母 評 代
由 与 代 良 中 理 季 繁 礼 石 作 為 真 堂

やはり実用的と考えられた字体には見られなかった字体が、人情本の序文においては使用されていた。下線を引いた 29 字体である。今回の調査で使用が確認されたように、これまであまり字体研究の主たる対象となつてこなかったものを調査すれば、残りの 54 字体の使用も確認できる可能性はある。ただ近代において平仮名を活字化するにあたっては、近世の版本で使用されていたものをそのまま活字化したとは限らない。実用的な字体については、版本で使用されていた字体を参考にしてきた可能性が高く、活字見本だけでなく、実際の活版印刷物の版面においても、近世版本において多用されていた字体を見出すことができる。だが序文という極めて限定的な範囲にしか見られないような字体を参考として活字を作成したとは考え難い。では装飾的な字体はどのように継承されてきたのであろうか。そこには古筆の存在があったのではないかと考えられる。

銭谷 (2015) においては、「近世版本には見られず明治期の活字見本のみに見られた字体」の内、その多く (67 字体) が古筆に見られる字体であるということ

¹⁴ 浜田(1979)、玉村(1994)、久保田篤(1997) 『『浮世風呂』の平仮名の用字法』『成蹊国文』30、(2009) 「江戸板本の表記の多様性—洒落本『傾城買二筋道』の場合』『成蹊国文』42、内田宗一(1998a) 「黄表紙・洒落本の仮名字体」『国語文字史の研究』4 (国語文字史研究会・前田富祺編、和泉書院)、(1998b) 『修紫田舎源氏』の仮名字体—作者自筆稿本と板本の比較考察』『待兼山論叢文学篇』32、(2000) 「馬琴作合巻『金比羅船利生纏』の仮名字体」『国語文字史の研究』5 (国語文字史研究会・前田富祺編、和泉書院)、松下なるみ(1996) 「平仮名の字体と字源」『漢字百科大事典』(佐藤喜代次編、明治書院)、『冥土の飛脚』の字体表のみ参照

も指摘した。このような古筆に由来する装飾的な字体は、一般教養としての手習いとは別に、書道や和歌など、平仮名に芸術性を求めたものの中で継承されてきたものと考えられる。教養層の間で芸術性を重視して用いられた古筆の字体が、装飾的な字体として用いられるようになっていたのではないかとすることである。

ただこのような古筆の字体を享受していたのは、教養層だけではなく、一般層にも古筆の字体を目にする機会があったのではないかと考えられる。それも出版物を通じてである。

出版物の例として、一つには仮名の字典類の存在が挙げられる。近世には『仮名考』『仮名類纂』といった仮名字典が出版されたが、そこには古筆に用いられる字体がその出自（作品名や作者名）とともに掲載されていた。

そしてもう一つには古筆の模刻本が挙げられる。例えば『秋萩帖』の模刻本は近世において盛んに出版されたことが指摘されている¹⁵。古筆のものではないが、きわめてそれに近いものに、近世の人々は触れることができたのである。なお『秋萩帖』には、他の古筆にはあまり見られない独自の字体が使用されている場合があるが、その『秋萩帖』特有の字体は近代の活字見本からも見いだされている¹⁶。そして今回の序文の調査においても、その字体が存在したのである。「あ」「字」「於」「ち」「勢」「比」「ゆ」「理」「え」がそれに該当し、特に「あ」「ち」は「ア」「チ」との差異が少なく、『秋萩帖』によって異体として認定されるようになったとも考えられる字体である。出版文化の中で、古筆の字体が継承されていったという側面もあったものと思われる。

このように近世の人々は出版物を通じて古筆の字体に触れる機会があった。それだからこそ人情本の序文の作者は自身の教養を読者に示すために、装飾的な字体として用いたのではないだろうか。また近代においてそれらの活字が製作されたのも、ある程度の需要を見込んでのことであると考えられる。

古筆の字体の習得については、今後近世の文字教育という観点からも検証する必要がある、また古筆の字体がそのまま装飾的な字体となった訳でもない。ただ装飾的な字体は、古筆の字体がベースとなっており、そこに出版文化もかかわっている可能性は十分に考えられるのである。

4. 序文と本文の仮名字体の比較

ここで実際に人情本の序文の字体と本文の字体との比較を試みる。近世版本においては使用されることのなかったと考えられた字体が見られるなど、序文においては一般的には用いられない字体が使用されていることが分かるが、やはり同

¹⁵ 古谷裕 (1996)『秋萩帖と草仮名の研究』(二玄社)に「その筆跡が小野道風の筆と伝えるところから、つとに尊重され、江戸時代にはすでに一般庶民の間に名筆として喧伝された。後述する数種の木版模刻手本の刊行によって、その盛行のほどを推察することができよう。」(p.202)とある。

¹⁶ 銭谷真人『秋萩帖』と近代活字 シンポジウム「変体仮名のこれまでとこれから」2017年11月25日於国立国語研究所にて発表

一作品内で序文と本文の字体を比較して、差異が現れることを確かめなければならない。振り仮名については、前節でみたように、序文であっても、装飾的な字体の使用は見られないので、本行についてのみ比較を行う。同じ字体が用いられていても、使用頻度に差が見られることもあるので、各字体の使用回数も集計した。調査範囲は各作品の最初の編の序文と最後の編の序文とした。本文はそれに対して同じ丁数分を調査した。例えば初編上序文一丁半、三編上序文一丁半を調査した場合、同じように初編上本文冒頭一丁半、三編上本文冒頭一丁半を調査する。最初と最後の二巻分としたのは、序文、本文とも編や巻によって書き手が異なる場合があるので、書き手による字体の異なりを勘案するとともに、ある程度用例数が集められる分量を確保するためである。なお『後正夢』は二・四編上のみに序文があったのでそれらの巻を、『江戸紫』は三編上の序文が半丁と短かったののでそのかわりに二編上を対象とした。

巻末表の右半分「序文と本文の仮名字体の比較」がその調査結果である。範囲を絞ったため、「序文における本行と振り仮名の仮名字体の比較」で見られた字体が一部みられなくなっている。そのため仮名字体数の合計も異なる場合がある。

作品ごとに見てみると、やはり序文の本行に使用される字体数の方が、本文の本行に使用される字体数を上回るようである。序文と本文で同じ丁数分調査を行っても、文字の大きさや漢字の使用率などから、本文の方が平仮名の使用数が多くなっているが、それにも関わらず、8作品中7作品で序文の方が使用される字体の種類が多いことが確認できた。ただ『連理梅』のように本文の方が上回る場合や、『娘節用』のように、序文と本文がほぼ同数である場合もあった。これは、序文は本文よりも分量が少ないため、仮名そのものの使用が認められない場合があることと、序文は巻ごとに使用される字体の差が大きいことによるものであると考えられる。『連理梅』は表1の五巻分の序文の本行の字体調査では107字体が確認されているが、表2の二巻分の調査では75字体しか確認されなかった。これらの字体は、本文に使用される字体と重なるものも多いが、「ち」「~~ぢ~~」「も」などの装飾性の高い字体も確認された。実用的ではないが故に、使用に幅があることも、装飾的な字体の特徴であるものと考えられる。

8作品全体で見ると、序文の本行に使用される字体数180、本文の本行に使用される字体数102と倍近くの差が表れた。この差は表1で行った序文の本行と振り仮名の使用字体数の比較した場合と非常に近い数値であった。試みに序文の振り仮名と本文の本行の字体を比較してみると、87字体が共通していた。本行と振り仮名では書記原理が異なるが、序文の振り仮名は「書き易さ」を、本文の本行は「読み易さ」を求めて平易な表記を行おうとしたために、このような一致が見られた可能性が考えられる。

個々の作品で見ると序文の用例が少なく分かり難いが、全体の用例数に注目してみると、序文においては、複雑な字形の字体を積極的に使用しているというこ

とが分かる。特に同字母で簡単な字体と複雑な字体がある場合には、極力複雑な字体を使用する傾向にあった。例えば「可」を字母とする字体の場合、本文は364例全て「う」を使用していたが、序文は「う」54例「ㄨ」62例と半数以上が複雑な方の字体が用いられていた。「幾」を字母とする字体の場合も同様で、本文は76例全て「き」を使用、序文は「き」23例「𠄎」22例とほぼ半々であった。このような傾向はいくつもの仮名で見られる。これらは仮名文字遣いを行い、字体を使い分けていた可能性もあるが、矢田（1996）¹⁷が指摘するように、同字母異字体の使い分けに衰退が見られた時代である。仮名文字遣い以上に装飾的な意味合いが強かったものと考えられる。ただ「𠄎」を係助詞『は』に使用する傾向がある（今回の調査範囲内で「𠄎」の使用が確認された『梅暦』『辰巳園』『連理梅』『江戸紫』においては全て係助詞『は』としての使用であった）など、仮名文字遣いの要素が全くないという訳でもない。その場合でも「ハ」や、同字母の簡略化された字体である「𠄎」ではなく「𠄎」が選択されたということは、装飾的な意味合いが強かったものとも考えられ、この点については今後考えていかななくてはならない課題となる。

5. おわりに

以上のように人情本の序文に使用される仮名字体について検証を行った。複数の人情本の序文を取り上げることにより、そこには実用的ではない、装飾的意味合いの強い字体が用いられていることを明らかにしてきた。やはり近世の後期には、実用的な字体と装飾的な字体の分化が、版本において見られるようになっていたのである。平仮名の字体が収斂していったことにより、両者の区別はより明確になっていったものと考えられる。

人情本に先行する洒落本や黄表紙においても、このような本文とは異なる仮名字体が用いられている序文は見られる。今後は遡って調査を行い、近世の版本における分化の過程を明らかにしていきたい。また今回は調査が及ばなかったが、装飾的な字体の用字法についても考える必要がある。装飾的な字体は仮名文字遣いとは関係なく同一字体の重複を避けるために変字法的に用いられていたのか、それともある程度は仮名文字遣いを意識して字体の使い分けが行われていたのか、改めて検証していきたい。

さらに古筆に由来する装飾的な字体がどのように習得されたのかなど、今後は文字教育史的な観点からも考察していきたいと考える。

- 銭谷真人（ぜにやまさと） 日本学術振興会特別研究員 PD -
※本研究は JSPS 科研費 JP18J00781 の助成を受けたものです。

¹⁷ 矢田勉（1996）「異体がな使い分けの衰退—一の仮名の場合—」『山口明徳教授還暦記念 国語学論集』

| | 序文における本行と振り仮名の仮名字体の比較 | | | | | | | | | | 序文と本文の仮名字体の比較 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----------------------|-----|----|-----|----|-----|-----|----|-----|-----|---------------|-----|----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|----|----|---|---|
| | 後正夢 | 縦節用 | 柳屋 | 辰巳園 | 花袋 | 志満台 | 江戸紫 | 全体 | 後正夢 | 縦節用 | 柳屋 | 辰巳園 | 花袋 | 志満台 | 江戸紫 | 全体 | | | | | | | | | | | | | | |
| ナ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1 | 2 | 1 | 2 | 6 | 0 | 2 | 1 | 4 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 5 | 20 | | | | |
| 130020010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | | | |
| 130030010 | ○ | | ○ | | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | | |
| 130050020 | ○ | | | | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | | |
| 130050030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 4 | 10 | 0 | 7 | 4 | 6 | 4 | 2 | 1 | 2 | 4 | 2 | 1 | 5 | 3 | 2 | 2 | 21 | 36 | 0 | | |
| 130060010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 15 | 0 | | |
| 130060020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 3 | 5 | 2 | 3 | 2 | 1 | 4 | 5 | 0 | 3 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 8 | 2 | 2 | 15 | 27 | | |
| # | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 3 | 5 | 0 | 5 | 1 | 5 | 1 | 4 | 0 | 6 | 0 | 2 | 1 | 7 | 4 | 4 | 10 | 38 | 0 | | | |
| 140010030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | | |
| 140220010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 4 | 8 | 0 | 12 | 6 | 20 | 4 | 28 | 1 | 6 | 0 | 11 | 1 | 6 | 2 | 2 | 18 | 93 | 0 | | | |
| 150030010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 1 | 0 | 5 | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 11 | 0 | | |
| 160010010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2 | 4 | 0 | 0 | 1 | 3 | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 | 1 | 0 | 10 | 9 | | |
| 160010010※2 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 5 | 0 | | |
| 160020020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | | |
| 160200030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 3 | 19 | 6 | 23 | 15 | 41 | 6 | 48 | 5 | 25 | 9 | 54 | 5 | 20 | 3 | 18 | 52 | 248 | 0 | | | |
| 170040010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | | |
| 180010010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2 | 4 | 0 | 6 | 4 | 5 | 4 | 6 | 1 | 6 | 0 | 4 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 | 2 | 11 | 35 | 0 | |
| 180010020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | | |
| 180220010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 10 | 0 | 23 | 1 | 16 | 2 | 19 | 0 | 5 | 1 | 7 | 0 | 7 | 2 | 5 | 6 | 92 | 0 | | | |
| 180300010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2 | 6 | 0 | 0 | 1 | 2 | 11 | 0 | 4 | 2 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 | 26 | 0 | | |
| 190010010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 3 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 1 | 6 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 11 | 7 | 0 | |
| 190050030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1 | 0 | 2 | 0 | 3 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 0 | 2 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 9 | 2 | 0 | |
| 190060010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2 | 30 | 4 | 30 | 10 | 23 | 3 | 18 | 8 | 17 | 3 | 43 | 0 | 32 | 3 | 22 | 33 | 215 | 0 | | | |
| 200050020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1 | 0 | 3 | 0 | 8 | 0 | 5 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 21 | 0 | | |
| 200050030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 4 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 8 | 0 | 8 | 0 | 0 | 8 | 0 | 28 | 0 | |
| 200660010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2 | 1 | 2 | 1 | 4 | 16 | 10 | 48 | 6 | 1 | 8 | 9 | 4 | 0 | 3 | 0 | 3 | 0 | 39 | 76 | 0 | |
| 200660020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 | 0 | 0 | |
| 210030010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 13 | 18 | 11 | 46 | 35 | 29 | 12 | 44 | 12 | 21 | 16 | 29 | 8 | 40 | 18 | 22 | 125 | 249 | 0 | | | |
| 210030020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2 | 19 | 0 | 0 | 1 | 16 | 0 | 5 | 1 | 11 | 2 | 13 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 64 | 0 | | |
| 210050010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 5 | 2 | 0 | | |
| 210050010※3 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 15 | 0 | 0 | |
| 210050020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 3 | 1 | 4 | 3 | 0 | 2 | 0 | 6 | 2 | 0 | 3 | 9 | 0 | 27 | 9 | 9 | 0 | 0 | |
| 210050030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | |
| 210050010※4 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2 | 1 | 4 | 1 | 10 | 1 | 9 | 3 | 8 | 3 | 3 | 6 | 25 | 2 | 11 | 31 | 59 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 210050020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1 | 28 | 0 | 29 | 1 | 27 | 2 | 64 | 2 | 6 | 1 | 38 | 5 | 13 | 0 | 24 | 12 | 229 | 0 | 0 | 0 | |
| 210050030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 | 3 | 2 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 25 | 4 | 0 | 0 | |
| 210050010※5 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 210050020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

| 字体仮名番号 | 序文における本行と振り仮名の仮名字体の比較 | | | | | | | | | | | | 序文と本文の仮名字体の比較 | | | | | | | | | | | |
|--------------|-----------------------|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|---------------|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|--|--|--|--|
| | 字体 | 後正夢 | 鏡部用 | 梅屋 | 辰巳園 | 花袋 | 志満台 | 通理梅 | 江戸紫 | 全体 | 後正夢 | 鏡部用 | 梅屋 | 辰巳園 | 花袋 | 志満台 | 通理梅 | 江戸紫 | 全体 | | | | | |
| 名 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 | | | | | |
| 410010010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 410020010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 410020020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 410020020*7 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 410020030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 410030010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 410040010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 410040010*8 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 420010010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 420010020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 420010020*9 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 420010030 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 420020010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 420020010*10 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 420030010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| ろ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 430020020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 430050010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| わ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 440030010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| あ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 460010020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| を | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 470010010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 470010020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 470050010 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 470050020 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 階別数合計 | 97 | 62 | 95 | 59 | 119 | 68 | 135 | 79 | 91 | 58 | 119 | 67 | 104 | 74 | 93 | 65 | 187 | 91 | 92 | 102 | | | | |

※1上部の形が異なる ※2学術用より簡略化 ※3学術用より簡略化 ※4学術用より字母に近い ※5ネではなくコの仮名として使用
 ※6学術用より字母に近い ※7上部の形が異なる ※8学術用より字母に近い ※9学術用より字母に近い ※10学術用より字母に近い